

# 大学評価・学位授与機構による「国際連携活動」の評価についての覚書

留学生センター 大嶋 眞紀

## はじめに

平成14年度の大学評価・学位授与機構（以下、機構と略す）による全学テーマ別評価は「国際的な連携及び交流活動」を対象とした。機構の名称といい、評価内容といい、評価活動に伴う諸文書のタイトルといい、どれも漢語がたくさん並んでいて、評価活動の初心者には理解の困難な領域である。たまたま全学の自己評価委員会のメンバーとなり、今回の評価項目のうち、「教育・学生交流」を担当することになったことや、また奇しくも機構の評価員にも任命されたため、他大学の評価活動にも深く関わるようになった。本稿では、その経緯や、評価項目、手法等について考えたこと、感想などを記すとともに、評価結果の概略についてもあわせてご報告したい。ただし、今回の評価活動に関する書類の大半は現段階で機構が回収済みであるため、記憶に基づく記述であることをお断りしたい。

また、留学生センターに大きく関わる「教育・学生交流」は今回のテーマ別評価で極めて高い評価を受けており、その点については特に強調しておきたい。

## 1 機構の評価システムについて

機構の評価システムについては、目的、基本方針、対象、実施体制、プロセス、結果の公表などすべてがマニュアル化され、かつWeb上でも情報公開され、説明会も行われている。本稿ではそれらの紹介や手続き的な部分は省略し、実質的な評価項目や評価活動について、考えさせられた点や、大学・留学生センター等が今後考慮していくべきではないかと思われる点などを記した。

### a 目的及び目標について

「目的」と「目標」のちがいについて、ふつうの日本人はどのぐらい明確に答えられるだろうかということを第一に思った。もちろん機構はマニュアル上で一応定義している。それによると、「目的」とは、大学等が教育研究活動を実施する全体的な意図、基本的な方針、基本的な性格などを指し、「目標」とは「目的」で示された意図を実現するための具体的な課題を指すとなっている。これ以外にも各所で、これらについては触れられ、また各大学の「目的」と「目標」はいったん事前調査され、機構からのフィードバックも受けている。つまり「目的」と「目標」の捉えかたに間違いや誤解がないようにという配慮は十分あったが、それでも各大学が十分理解したとは言いがたい側面があった。例えば、多くの大学が「学术交流協定の締結を促進する」という「目標」を掲げたが、「目標」の記述としては適切でないという議論があった。「目標」とはあくまで「学生や教員の交流を盛んにする」ということであり、協定の締結はその手段であるという捉えかたである。

言い換えるならば、「目的」では、なぜ「学生や教員の交流を盛んにする」ことが必要なのかについて、大学の基本的な考え方を示さなければならず、「目標」ではその理念を実現するために「学生や教員の交流を盛んにする」、そのための活動として、例えば「交換留学生の受け入れを増やす」などの具体的な活動をあげる。協定の締結は手段であるため、さらにそれよりも下位に置くという発想だ。

機構のこのような視点はなじみがうすく、大学側に十分伝わってはいなかったと思う。

また「目的」や「目標」を各大学が自由に設定していいということも、あまり柔軟には捉えられていなかった点と、そのことが大学自体の自己評価、絶対評価に深く関わっているという点についての認識が十分に行き渡ってはいなかったと考える。言い換えるならば、各大学とも機構が示した模範的な目標設定のもとで、他大学との相対評価を絶えず意識していたという実態は否定できない。

#### b 活動の分類について

このことについても、自由な分類が可能であったにも関わらず、「教職員の受け入れ・派遣」「国際共同研究の実施」等々、似たような分類が大半であった。機構の例示があったためと思われる。さらにその下位分類としての「対象となる活動」のすべてが、のちのち評価の対象となるという点について、評価される側がどこまで認識していたかという問題がある。細かい活動例をたくさん提示すれば、理論上は、以下に示す評価項目、及び評価の観点、着目点のすべてに記述が及ばなければならなくなる。このことを当初から明確に把握していた大学というのはわずかではなかったかと思う。大学評価の体制がまだ整っておらず、認識も不十分であるといわざるをえない。

活動分類	対象となる活動	評価項目	評価の観点	評価の着目点
		実施体制	各評価項目ごとに 2又は3の観点	各観点ごとに3又 は4の着目点
		活動の内容及び 方法		
		活動に実績及び 効果		

仮に、ある大学が「活動分類」を五つ、それぞれの分類下にある「対象となる活動」を五つ、設定したとする。そのそれぞれについて、評価項目、評価項目ごとの観点、観点ごとの着目点に基づく記述を1パラグラフとすると、想定される総パラグラフ数は以下ようになる。

$$5 \times 5 \times 3 \times 3 \times 4 = 900$$

各パラグラフの行数、及び添付する根拠データを考えると、かなりの作業量が予測できる。鹿児島大学の場合、結果として、分厚い自己評価書が出来上がったが、はじめからある程度予想できていれば、力点を置く部分と省略する部分などの調整がとれたであろうと思う。

### c 評価項目、及び評価の観点、着目点について

評価項目は各活動についての「実施体制」「活動の内容及び方法」「活動の実績及び効果」の三つが設定されていた。さらにそれぞれの項目について、評価の観点、着目点などが設定されている。評価者の主観、偏りを排除するための様々な工夫がなされていたと思うが、困難な点もあった。「実施体制」のうち、二番目に設定された「活動目標の周知・公表」という観点は、評価の対象が過去5年間の活動を対象としていたということもあり、5年前にどのように活動目標が周知されていたかという点になるとなかなか明確な回答が残されていないか、あるいはそれほど明確には設定されていなかったという問題があった。同じことは「活動の内容及び方法」のうち、一番目の観点として設定された「活動計画・内容」についても言える。過去5年間の活動は、実績として捉えるのは困難ではないが、計画・内容として捉えるのは必ずしも容易ではない。また計画を立て、予算を獲得し、実行して評価するという流れが国立大学ではそれほど明確ではなかったという側面もあり、評価手法と実態の齟齬が感じられた。

### d 根拠資料・データについて

この点についても、あとから次々とデータを提出するという事態が生じたと思う。評価システムに大学全体がまだ不慣れであるため、日ごろの活動をどのようにしてデータとして残すかということについてこれまであまり意識的ではなかったという点があげられる。また今後は、のちの評価を意識するあまり、データを残すことが諸活動の主目的にもなりかねないという点も考えさせられた。すでにそのような兆候はあちこちで散見される。

### e ヒアリングについて

ヒアリングは評価活動のいわば総仕上げであり、今回のような「国際連携活動」では、各活動分類について広く深く熟知しているか、あるいは特定の活動を強調する場合は、その担当者が直接ヒアリングを受けるのが一番強力であると思われた。現場を知っていることの強みがヒアリングの成果を左右すると言っても過言ではない。

### f 評価システムの改善について

機構は今回の評価システムについて、各評価員からも、今回の大学評価に適用したシステムとまったく同じ基準を用いて、意見聴取を行っている。また評価結果についても途中、あるいはヒアリング時、最終申し立て時の三回にわたって、評価される側からの申し立てを受ける姿勢を一貫して保っている点は十分に評価できると思った。

## 2 鹿児島大学の評価結果について

次に鹿児島大学の評価結果について、簡単に触れたい。2004年3月に機構から社会に公表されたものである。大学が2003年7月に機構に提出した自己評価書は122頁、さらに9月に追加提出した



「書面調査段階における確認事項等」が37頁と膨大なものだが、機構による最終的な評価報告書は各大学とも一律12頁である。

大学全体としては、「国際連携活動」に資する実施体制、活動の内容及び方法については「おおむね貢献している」と判断された。この表現は5段階評価の4という意味である。さらに活動の実績及び効果については「十分に挙げられている」という高い評価を受けた。以下の評価結果すべてについて言えることだが、鹿児島大学は11月のヒアリングののち、全体に評価結果を大幅に上げている。

さらに個々の活動分類については以下のような判断が2004年1月28日の段階で機構より示されている。

活動の分類	評価項目	観 点	機構判断結果
教職員の受け入れ・派遣	1 実施体制	1 実施体制の整備・機能	相応である
		2 活動目標の周知・公表	相応である
		3 改善システムの整備・機能	優れている
	2 活動の内容及び方法	1 活動計画・内容	相応である
		2 活動の方法	優れている
	3 活動の実績及び効果	1 活動の実績	優れている
2 活動の効果		優れている	

活動分類ごとの評価は、基本的には3段階評価である。「教職員の受け入れ・派遣」では、中間の「相応である」という評価が三つの観点でなされた。実施体制の整備・機能という観点では、全学的により組織的に行う必要があるという評価である。各学部が何年度に何人ぐらい、どの地域から、あるいはどの地域へ派遣・受け入れを行うのかという点が明快であれば高い評価を得たと思われるが、国立大学のシステム上の限界もある。「教育・学生交流」についてはのちの留学生センターの評価の部分で述べたい。

活動の分類	評価項目	観 点	機構判断結果
国際会議等の開催・参加	1 実施体制	1 実施体制の整備・機能	相応である
		2 活動目標の周知・公表	優れている
		3 改善システムの整備・機能	相応である
	2 活動の内容及び方法	1 活動計画・内容	相応である
		2 活動の方法	優れている
	3 活動の実績及び効果	1 活動の実績	相応である
2 活動の効果		優れている	

この活動分類では、特に「京都賞受賞者講演会」の実施方法が高く評価されたと思う。地域社会への活動目標の周知・公表、大学・県・市・商工会議所などが一体となって稲盛財団とともに実施している手法、及び地域社会への広範囲な波及効果などが高く評価された。しかしながら、国際会議等の開催全般については大学としての組織的、計画的な取り組みはまだ十分ではないと評価されている。

活動の分類	評価項目	観 点	機構判断結果
国際共同研究 の実施・参画	1 実施体制	1 実施体制の整備・機能	優れている
		2 活動目標の周知・公表	優れている
		3 改善システムの整備・機能	優れている
	2 活動の内容及 び方法	1 活動計画・内容	優れている
		2 活動の方法	優れている
	3 活動の実績及 び効果	1 活動の実績	優れている
2 活動の効果		優れている	

この活動分類はいわばオールAの評価を受けている。島嶼地域、遺伝資源、成人T細胞白血病、環境保全、食糧などのキーワードに集約される共同研究が当初の自己評価書に記載されていたが、その後、9月の追加資料の提出の段階で、NASAとの共同研究や、火山灰観測システムの共同研究についての海外の報道、さらには鹿児島大学の国際共同研究の現況を集約した冊子の発行とWebへの掲載など、次々と新データが追加され、このような評価に至った。しかし、大学全体ではまだまだ今回の評価活動に反映されていない共同研究が潜んでいると思われる。研究成果の集約方法についても今後一層の改善が必要ではないだろうか。

活動の分類	評価項目	観 点	機構判断結果
発展途上国等 への国際協力	1 実施体制	1 実施体制の整備・機能	相応である
		2 活動目標の周知・公表	相応である
		3 改善システムの整備・機能	相応である
	2 活動の内容及 び方法	1 活動計画・内容	相応である
		2 活動の方法	相応である
	3 活動の実績及 び効果	1 活動の実績	優れている
2 活動の効果		優れている	

実績については高く評価されたが、全体の実施体制、計画等については「相応である」と判断された。

因みに、機構の自己評価書の最後に掲載されている「評価項目ごとの評価結果」の中で特に優れた点としてとりあげられたものを以下に記載する。（「教育・学生交流」に関わる部分は次項に記載）

**\*実施体制**

- ・ジョージア州への教員派遣 ・京都賞受賞者講演会 ・フィリピンとの拠点大学方式の共同研究
- ・NASA及び西オーストラリア大学等との共同研究

**\*活動の内容及び方法**

- ・外国人研究者宿泊施設の建設 ・法文及び教育学部主催の海外文学者による朗読講演会の実施
- ・島嶼地域に関する共同研究 ・HTLV-1及びHAMに関する共同研究

**\*活動の実績及び効果**

- ・プトラマレイシア大学との共同研究及び学術交流協定締結
- ・国際共同研究の成果数

- ・中国湖南大学との共同研究及び教育的成果
- ・多島域についての総合研究プロジェクト
- ・HAMに関する国際学会の開催及び学会大会賞の受賞
- ・国際的な地域医療への貢献

### 3 「教育・学生交流」の評価結果について

活動の分類	評価項目	観 点	機構判断結果
教育・学生交流	1 実施体制	1 実施体制の整備・機能	優れている
		2 活動目標の周知・公表	優れている
		3 改善システムの整備・機能	優れている
	2 活動の内容及び方法	1 活動計画・内容	優れている
		2 活動の方法	優れている
	3 活動の実績及び効果	1 活動の実績	優れている
2 活動の効果		優れている	

活動分類「教育・学生交流」でもオールAの評価を受けた。全国的に見ても高い評価を受けたと思う。ことにその内容は留学生センターの活動に言及した部分が多く、しかも鹿児島大学の留学生センターが全国の留学生センターの定員規模と比べて最少の組織（定員4名）であることを考慮に入れると、今回の結果は十分報告に値すると確信している。

以下に掲げるのは大学評価・学位授与機構が最終的にまとめた『評価報告書』中、「活動の分類ごとの評価結果」の「教育・学生交流」の部分（原文そのまま）、及び「評価項目ごとの評価結果」の中で特色ある点または優れた点としてとりあげられた部分の引用（原文のまま）である。

#### a 「活動の分類ごとの評価結果」

##### 教育・学生交流

##### 実施体制

**実施体制の整備・機能** 留学生受け入れ・派遣は、留学生センター（専任教員4名）、学生部留学生課（職員4名）が推進している。留学生センターの運営は、センター教員、関係部局委員から成る留学生センター運営委員会（センター長を長とする）の審議・決定によって方向づけられている。センターは3部門から成る。日本語研修コース部門は、大使館推薦大学院入学前日本語研修生を主たる対象とし、日本語一般コース部門はそれ以外の留学生を対象としている。相談指導部門は、各学部の留学生指導教官、国際交流会館の留学生相談指導主事（外国人教員を含む教員3名）、保健管理センターなどと連携しつつ、留学生に関わる諸問題に対処している。

留学生と地域社会との交流支援として、相談指導部門教員が責任者となり、外国人留学生会、世界を広げよう会などの留学生及び日本人学生の自主的組織を組み入れて、平成13年度より「多国籍合宿」が開始されている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

**活動目標の周知・公表** 本活動の目標等は、留学生センター運営委員会の各部局の代表者及び留学生課を通じて、全学に伝えられている。



学外への本活動の趣旨等の公表は、英文の概要、ハンドブック、日英中3カ国語による留学生センターパンフレット等の冊子、英文ホームページなどが利用されている。協定校には、国際交流課及び関係教員も仲介の労をとっており、短期留学生の来日後のインタビューなどにより、これらの手段が概ね機能していることが窺われる。

日本人学生の海外派遣の趣旨・手順等については、入学時のオリエンテーション、派遣留学説明会などで学生に周知している。「海外実地研修プログラム」については、共通教育委員会（現大学教育センター）で立案・審議・実施されており、目標等はシラバスに明記されている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

**改善システムの整備・機能** 留学生センターの各部門の活動に関しては、調査やオープンクラスなどの多様な方法により、活動の問題点等を把握するための情報収集を積極的に行なっている。その情報は、担当者のミーティングなどを通じて改善に結び付けられている。

全学的な実施体制の改善などについては、各部局にその趣旨が伝わるのに時間を要するなどの改善点もあるが、全留学生を対象としたアンケート結果等に基づいて、運営諮問会議などから提言が出され、国際交流委員会等を通じて、各部局に改善のための指導等が行なわれている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

## 活動の内容及び方法

**活動計画・内容** 外国人留学生として、短期留学生、国費留学生、私費留学生、県費留学生など、アジアを中心に、世界各地からバランスよく受け入れが行なわれている。外国人留学生と地域等との交流機会として、「多国籍合宿」、小学校への講師派遣などが企画・実施されている。日本人学生の海外派遣として、海外調査実習、協定校への短期留学などを行なっている。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

**活動の方法** 学生交流協定（国際学術交流協定の一部）を42大学と締結（内29大学と授業料不徴収協定を締結）し、短期留学を中心とした教育交流を促進している。

円滑な留学生受入れのために、「留学生を迎えるためのマニュアル」が作られ、受入れ教職員に配布されている。

日本語研修コースでは、留学生の来日前後、日本語学習導入時など、随時、受入れ教員、日本人学生ボランティアと連携を取りつつ、留学生の適応が図られている。日本語教育プログラムは、プレースメント・テストによりレベルに応じた多様なプログラムが提供されると共に、留学生の家族も受講できるように配慮されている。また、実践的なコミュニケーション・タスク（一般市民へのポスター発表等）の手法なども授業に導入されている。

教育交流として、理工学研究科において、カリフォルニア大学バークレー校のライト教授によるMOT（Management of Technology）の講義ビデオをWeb等で放映し、当該大学の教員がテキストを用いて解説と評価を実施することにより4単位認定している。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

## 活動の実績及び効果

**活動の実績** 外国人留学生の受入れは、平成12年に300名を超え、平成15年は325名となっている。地域としては、

中国を中心にアジアが8割を超えており、アフリカ、中南米などからも、10人強の受入れがある。大学院留学生が2／3程度を占めるが、すべての学部・研究科が受入れを行なっている。日本語教育プログラムは、受講生のレベルの多様性に対応して開講コマ数も増え、平成14年後期には、49コマ、受講者数も300名を超えている。

日本人学生の海外実習は、理・工・農・水産学部等で毎年実施されている。派遣先はマレーシア、韓国、中国などのアジアを中心に、イタリア、アメリカなども含まれている。学生交流協定校との短期留学推進制度による日本からの留学派遣は、アジアの協定校を中心に、平成12～14年度、4、8、12名と漸増している。

以上から、この観点の状況は目標に照らして優れている。

**活動の効果** 外国人留学生を対象とするアンケート調査（平成13年度実施）では、ほぼ75%の留学生が満足しており、おおむね良好な結果が得られている。

日本語教育プログラムでも、受講者の満足度も高く、授業公開時の外部参観も工夫された授業が行なわれていると賞賛している。さらに、学外からも受講希望があり、海外漁業協力団体からの研修生が日本語能力試験3級、4級レベルに合格するなど、社会ニーズにも応えている。

協定校への短期留学を経験した日本人学生、海外実地研修の参加者の体験談によれば、視野の広がりや人とのふれあいなど貴重な成果が得られていることが窺える。

多国籍合宿は、平成14年度には、留学生、日本人学生、地域からの一般参加、それぞれ約100名ずつと、前年の3倍となる盛況を見せ、アンケート調査からも満足度が高いことが窺われる。その模様は、南日本新聞にも取り上げられ（平成14年5月26日付）、留学生のみならず、地域の国際交流に対してもインパクトを与えている。

## b 「評価項目ごとの評価結果」

### [実施体制]

- ・ 留学生センター及び留学生課が、学内外の組織と連携を取りつつ、留学生を多面的に支援する体制をとっていることにより「優れている」
- ・ 「教育・学生交流」はアンケート、授業公開など、多様な情報収集がなされ、改善が試みられている点などにより「優れている」
- ・ 留学生センター相談指導部門が主催し、鹿児島大学留学生会（KUFSA）、「世界を広げよう会」などが共催で行っている「多国籍合宿」の実施体制は、教員、学生、留学生などの連携を実現した特色のある取り組みである。
- ・ 日本語研修コースの授業評価は、学期最後のみならず、学期半ばにも実施され、専任教員、非常勤講師合同のミーティングにより、担当者の交代や学習者への個別学習指導などの改善が試みられている点は、特に優れている。
- ・ 留学生に対する日本人学生チューター制度に関して、一部の留学生、チューターからの不満の声を受け止め、敏速に、平成14年度よりチューター指導体制・マニュアルなどを見直している点は特色ある取り組みである。

### [活動の内容及び方法]

- ・ 「教育・学生交流」は、きめの細かい日本語プログラム、多国籍合宿の企画・実施などにより「優れている」
- ・ 「教育・学生交流」は、留学生受け入れのためのマニュアル作成、最新の教授法を取り入れた多様な日本語教



育プログラムなどにより「優れている」

- ・ オーストラリアのニューイングランド大学との共同開発で、日本文化教材を開発し、異文化理解教材として活用している点は特色ある取り組みである。

[活動の実績及び効果]

- ・ 「教育・学生交流」は、(途中省略) 当該大学の目的・目標に沿った実績が上げられていることにより「優れている」
- ・ 「教育・学生交流」は外国人留学生等の満足度の高さ、多国籍合宿の地域へのインパクトなどにより「優れている」
- ・ 多国籍合宿は、地域からも100名程の参加が見られるなど、参加者が増えており、留学生のみならず、日本人学生、地域にとっても、外国文化に触れ合う機会として地域に定着しつつある効果は特に優れている。

以上のように、「国際連携活動」中「教育・学生交流」について鹿児島大学は高い評価を受けた。発足して4年目の、全国的にも最少規模の留学生センターとしてはよい結果を出せたと考えているが、それでも日々、新たな問題に遭遇している。そしてそれらの問題のいくつかは、昨日今日突然出現した問題というわけではなく、長い時間、地に埋もれていたような問題でもある。大学の評価が問われる昨今、評価をする側のむずかしさと、評価される側の複雑さを合わせて考えさせられたといわざるをえない。